

宗祇連歌の研究

阿部 信一 著

両角倉

著

宗祇連歌の研究

勉誠社

江蘇工業学院图书馆藏書章

著者

両角倉 一（もろすみそういち）

略歴 昭和十一年一月、東京都に生まれる。

昭和三十五年三月、東京教育大学大学院修士課程修了。現在、山梨県立女子短期大学教授。

現住所 400 甲府市羽黒町一六二四一六

編著 『下草へ宗祇句集・宗梅本』（古典文庫）

論文 『千句連歌集二』（古典文庫、共編）
『紹巴連歌試考』（『国語と国文字』39卷3号）

『里村紹巴小伝』（『連歌俳諧研究』24号）

その他。

宗祇連歌の研究

著者 両角倉 一

発行者 池嶋 洋次

発行所 (株) 勉誠 社

東京都目黒区大橋二丁目十二番十六号
〒一五三 電話(〇三)四六〇一九七六一

整版印刷 東洋印刷(株)
製本 和田製本工業(株)

昭和六十年七月二十五日初版発行

まえがき

本書は、八十二歳で没した連歌師宗祇の文学的営為の中から、長連歌・自撰句集・発句関係資料・七賢句集と准勅撰連歌句集・古典学などに関する基礎的な論考を収め、巻末に宗祇の年譜を添えたものである。

第一章「長連歌の表現」は、宗祇関係の現存する百韻・千句の内、独吟・両吟・三吟にしぼって、その作品の表現の傾向を概観している。独吟については、初期から後期にいたる数段階の変化を指摘し、両吟と三吟については、宗祇の行様への配慮の絶妙さと『水無瀬三吟百韻』の典型性を強調してみた。

第二章「自撰句集の形成」では、宗祇が持続的な情熱を注いだ四つの自撰句集『萱草』、『(初編)老葉』、『(再編)老葉』、『下草』の錯綜する形成過程について検討した試案を報告し、その句風の変遷にも言及した。

第三章「宗祇発句資料覚書」は、第一節で夢庵肖柏の編集した宗祇発句集『自然斎発句』の諸本お

よび別系統の宗祇発句集の諸本について、それぞれの書誌を報告し、第二節では、『宗祇発句判詞』『祇公七十句自注』『宇良葉』などに関する基礎的な覚書を記した。

第四章『竹林抄』と『新撰菟玖波集』は、第一節では『竹林抄』の諸本調査の中間報告をし、第二節と第三節では、二つの句集について句形修訂の問題など撰者の積極性に注目して考察してみた。第四節と第五節は、『新撰菟玖波集』の表現の一端を観察し、和歌と連歌の表現の差にも少しく言及している。

第五章「古典学と連歌」では、宗祇の文学活動の二つの柱である古典学と連歌の内、前者を中心に扱い、序説と『万葉集』と『古今集』に関する小考を収めた。諸家によって次第に開拓されて来た分野であるが、残された研究課題も多い。

巻末の「宗祇略年譜」は旧稿に修正を加えつつ簡略化したもの。依然として霧に包まれている宗祇の前半生については数行を記したのみで、後半生の閲歴と事蹟の記載が主である。

学恩をこうむった先学の業績は数多く、書き尽くせないが、ここでは、先行研究の中より「宗祇」の名を含む単行本のみ掲げ、感謝の意をあらわす事としたい。

荒木良雄『宗祇』（創元社、昭和16年）

伊地知鐵男『宗祇』（青梧堂、昭和18年）

井本農一『宗祇論』（三省堂、昭和19年）

小西甚一『宗祇連歌集、萱草』（古典文庫、昭和25年）

小西甚一・水上甲子三『宗祇連歌集、老葉』（古典文庫、昭和28年）

星加宗一『宗祇発句集』（岩波文庫、昭和28年）

金子金治郎『宗祇作品集』（桜楓社、昭和38年）

金子金治郎『宗祇連歌古注』（広島中世文芸研究会、昭和40年）

江藤保定『宗祇の研究』（風間書房、昭和42年）

金子金治郎『宗祇旅の記私注』（桜楓社、昭和45年）

小西甚一『宗祇』（筑摩書房、昭和46年）

井本農一『宗祇、浪漫と憂愁』（淡交社、昭和49年）

金子金治郎・伊地知鐵男『宗祇句集』（角川書店、昭和52年）

金子金治郎『宗祇の生活と作品』（桜楓社、昭和58年）

藤原正義『宗祇序説』（風間書房、昭和59年）

目次

まえがき

第一章 長連歌の表現……………一

第一節 宗祇の独吟連歌……………三

第二節 『独吟本式何人百韻』の表現……………三

第三節 両吟・三吟の概観と『水無瀬三吟』の行様……………六

第二章 自撰句集の形成……………七

はじめに……………七

第一節 『萱草』の諸本と編集資料……………六

第二節 『萱草』の特色……………九

第三節 『初編老葉』について……………九

第四節 『再編老葉』の諸本の性格……………一〇七

第五節 『下草』の成立と展開……………一三七

第三章 宗祇発句資料覚書	一五三
第一節 『宗祇発句集』書誌	一五五
第二節 『宗祇発句判詞』その他	一八三
第四章 『竹林抄』と『新撰菟玖波集』	一九七
はじめに	一九九
第一節 『竹林抄』の諸本と成立	二〇〇
第二節 『竹林抄』の編集資料	二二三
― 行助の句を中心に ―	
第三節 『新撰菟玖波集』の編集資料と句形修訂	二三一
第四節 『新撰菟玖波集』の語彙と一句の作様	二三三
― 非歌語的語彙を中心に ―	
第五節 『新撰菟玖波集』の付様の一面	二六〇
― 「とりなし付」を中心に ―	
第五章 古典学と連歌	二〇三

第一節 宗祇古典学序説	三〇五
第二節 『万葉集』の享受	三二八
第三節 『万葉集』の享受、補遺	三四二
第四節 『古今集』の享受	三五三
付録 宗祇略年譜	三七三
あとがき	三九七

第一章 長連歌の表現

第一節 宗祇の独吟連歌

1

写本の連歌叢書として知られている静嘉堂文庫所蔵の連歌集書は、百韻連歌を作者の人数によって「独吟百韻」「両吟百韻」「三吟百韻」「連衆百韻」などと分けて整理している。^(注1)右の分類に言う四人以上の作者が一座に参加する連衆百韻や連衆千句が長連歌の基本的な張行形態であり、宗祇の加わった長連歌で現存する作品もこの種のものがもっとも多い。^(注2)

そのような狭義の「連衆」^(注3)から成る作品にくらべて、独吟・両吟・三吟の連歌は、やや特殊な張行と言えようが、連歌作者個人の句風（句の作風）を見るにあたっては、やはり、個人の出句数の多い百韻や千句を直接の対象とするのが好都合である。そのような意味合いで、独吟連歌を最初に取り上げ、次に、両吟・三吟の順に概観を試みたいと思う。

まず宗祇の独吟連歌で現存するものを成立順に掲げると次のようである。（作品は発句のみ記す。独吟では、発句のみ他人の作を利用する場合もある。なお、俳諧的な『量字百韻』は、ここには含めない。）

① 寛正二年（一四六一）正月一日『何人百韻』

天の戸を春立出る日影かな 専順

② 寛正二年九月二十三日『何人百韻』

岩がねに秋をふる木の小まつ哉 章棟

③ 寛正四年（一四六三）三月『何舟百韻』

払ふべき風だに霞む月夜かな

④ 寛正五年（一四六四）正月一日『名所百韻』

花の春たてる所や吉野山 専順

⑤ 文正二年（一四六七）正月一日『名所百韻』
※一説に文明二年成立。

富士の根も年はこえける霞哉

⑥ 応仁二年（一四六八）正月一日『何人百韻』
（夕何）※一説に文明二年成立。

月の秋花の春たつ朝かな

⑦ 文明二年（一四七〇）以前『何船百韻』
※寛正年間
成立か。

春はまたあすとして越ることし哉 専順

⑧ 文明三年（一四七二）三月二十一日～二十三日『三島千句』

（第一）なべて世の風をおさめよ神の春

- ⑨ 文明五年（一四七三）以前『山何百韻』
霞かは春立雪の朝ぐもり 専順
- ⑩ 文明八年（一四七六）二月十一日^{（三五）}『何路百韻』
朝なげにさしそふ春の光哉
- ⑪ 文明十二年（一四八〇）秋『百韻』
見るまゝにさながら月の光かな 政弘
- ⑫ 延徳二年（一四九〇）九月『夢想百韻』
住吉の松こそ道のしるべなれ 御（夢想）
- ⑬ 延徳四年（一四九二）六月一日^{（三五）}『何路百韻』
陰すゞし猶木だかゝれ小松原
- ⑭ 明応四年（一四九五）以前『淀渡百韻』
嵐にも春たつ梅の匂ひ哉
- ⑮ 明応五年（一四九六）正月九日『本式何人百韻』
引かじけふ松のおもはん老の春
- ⑯ 明応八年（一四九九）三月二十日頃～七月二十日『何人百韻』
かぎりさへ似たる花なき桜哉
- ⑰ 年時未詳（文明年中の十二月）『名所百韻』

月に降時雨や風の音羽山

⑮ 年時未詳 『勅点百韻』

春や立霞のなみの四方の海

⑯ 年時未詳 『要文百韻』

雲となりしなごりは袖の時雨哉

⑰ 年時未詳 『朝何百韻』

おもかげに露をく花の青葉哉

⑱ 年時未詳 『宝号百韻』

ながくひけ霜の花さく草かづら
士阮

⑲ 年時未詳 『何鳥百韻』

花やみん比や野分の朝じめり

⑳ 年時未詳 『河内和泉摂津名所百韻』

引とめよ春行く雲の生駒山

2

宗祇四十代の寛正年間の独吟としては、①④⑦⑨など専順の発句を巻頭に置いた作品が目につく。⑦は「文明

六年霜月」の作という所伝があるけれど、その長連歌の内、付句三が、文明六年春成立の自撰句集『萱草』に所収であるから、文明五年冬以前の詠吟と見るべきであり、その入集句の付句の一つには「北畠大納言家の百句に」と詞書があり、伊勢国司北畠大納言教具の死没の年（文明三年三月）以前の作で、年内立春の発句という事で文明二年以前の成立と考証する事ができる。尊経閣文庫本は成立年時を記さないが、句上げに「専順一、宗祇九十九、付墨三十二句、専順法眼点」とあり、寛正年間頃の専順の指導による稽古連歌であろう。⑨の百韻も、詞書「独吟のうちに」「独吟の連歌の内に」などとして『萱草』に付句三が入集しているので、文明五年春以前の作と推定され、東国下向以前の寛正年間の成立であるかも知れない。他に②と④が専順の点を仰いだものとされており、結局③以外の寛正年間の独吟百韻は、いずれも専順の指導を仰いだ稽古性の強い作品と総括できそうである。

現存する宗祇の独吟連歌の最古の作品である①『何人百韻』の巻頭と巻末の数句は次のようになっている。

- | | | |
|----|----------------|----|
| 1 | 天の戸を春立出る日影かな | 専順 |
| 2 | かすみにまじる雪の朝あけ | 宗祇 |
| 3 | 風にほふ山もとさむく梅さきて | |
| 98 | 光を添へよ窓のとぼし火 | |
| 99 | 名を留むる道は学ぶを便りにて | |

100 八千代をかくるこの連歌(つらねうた)

師の専順の発句を巻頭に置いて、脇・第三と宗祇は早春の風景を連ね、以下温雅な一卷で、巻末は稽古連歌としての学ぶ姿勢をあらわに表出している。この百韻を始めとして、以後、毎年、年頭に独吟連歌を詠作したものである。

在京中の修業時代に区切りをつけて、宗祇は、文正元年に下向した。東国に移っても、年頭独吟詠の習慣は継続していたらしい。東国下向中の作品として知られている⑤と⑥の百韻の発句は、自撰句集『萱草』の巻一の巻頭に次のように並べて掲げられている。

正月朔日独吟の連歌し侍しに、

月の秋花の春たつあした哉

おなじき毎年の独吟にあづまにて、

富士のねもとしはこえける霞哉

「毎年の独吟に」という詞書に注目したいのである。「富士のねも」の発句には、東国に下向して初めて迎える当地の感慨が富士の遠望の描写と重ねられて生彩を放っている。(注4)

一方、「月の秋」の句は、やや意外性のある表現で、後になって、宗祇自身が次のように解説している。

「霞をもまたで春たつみやかな

月の秋花の春たつあしたかな